魔法の解き方

黒靴

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8927317

カミュベロ, ベロニカ, カミュ

ネタバレと捏造あります。

魔法オタクなベロニカとカミュが 魔法を解く話です。
お姉さまのためにセーニャちゃんもがんばってます。

カミュベロ版ワンドロワンライのお題「童話」をお借りしています。

実は前からファーリス王子の唾液を試験管にもらいにいこうとするベロニカと、それを止めるカミュが書きたかったのです。

Table of Contents

魔法の解き方

星がきらめく砂漠の夜。
灯り代わりの火球魔法を浮かべたその下で、ぽたり、ぽたりと水晶の花に雫を落とす。
姉妹ふたりが声を合わせて詠唱を行い、両側から薔薇の花弁一枚一枚に魔力を込めていくと、水晶でできた薔薇はまばゆい光を放ち始めーーー

パリン！

「あーっ！」

砕けてしまった。
セーニャはがっくりと項垂れ、ベロニカは小さく溜め息をついた。
「やっぱりガセネタだったわね。まあ、仕方ない」
「残念ですわ。砂漠のバラに神聖水を垂らして魔力を閉じ込めれば、解呪効果のある宝珠になるというお話……素材の希少価値もありますし、信憑性が高いと思ったんですが……」

日付が変わって数十分。
サマディー地方の砂漠で真夜中にだけ見つけられるという、砂漠のバラを求めてやってきた姉妹は、見つけたその場で魔術加工を試してみること計３回。いずれも期待した結果にはならず、諦めるに至る。
テントを張った女神像の元へ戻ると、バラをいくつも抱えたカミュがちょうど戻ってくるところだった。
「大漁大漁。そっちはどうだったんだ？」
「だめだった。まあ、今回は文献の方も少し怪しかったから仕方ないわ」
「そりゃ残念だったな」

勇者を導くという使命を全うしたベロニカとセーニャが、平和な世界でベロニカの年齢を取り戻す方法を探し始めて半年あまり。
ヒントになりそうなものは手当たり次第に試しているが、未だ正解には辿り着かない。
今回のように、トレジャーハントのついでのように、カミュが素材探しに同行することも何度かあった。

「オレの方はこれだけあれば、たんまり報酬がいただけそうだ。換金したら残念記念に奢ってやるよ」
「まあ！でしたらサマディーですし、サボテンステーキが食べたいです」
「もう、セーニャってば。でもそうね、せっかくサマディーまできてるんだから、明日は王様に頼んで王立図書室でも見せてもらいましょうか」
食べ物の話にはすぐ食い付く妹を諌めつつ、ベロニカも頷く。
「お前本当に切り替え早いよな。こんなに失敗続きなのにへこんだりしないし」
「へこんでる時間がもったいないわ。ひとつだめなら次に活かすのみよ」
さっさと寝る支度をはじめるベロニカに、カミュが顔に出さずに感心していると、セーニャが嬉しそうに空を指差した。
「お姉さま、カミュさま。今日は冷え込みも強くないみたいですし、星を見ながら寝ませんか？流れ星も見られるかも！」

火を焚いている脇で、ベロニカとセーニャが寝袋に入って横になる。砂漠の夜は気温が下がるが、盛夏の今は、風邪を引くほどではなさそうだ。
ふたりがどんなに気にしないと言っても、カミュだけは丸太にもたれかかった姿勢のまま休むといって聞かなかった。
「こうしていると旅の間のことを思い出しますね」

「まだそんなに経っていないのに、なんだかもう懐かしい気がするわ」
姉妹が実に楽しそうに、話しながらくすくすと笑っている。
「お前ら、明日はサマディーでやることあるんだろ。夏の夜は短いんだ、あと３時間もすれば空が白んでくるぜ」
「だって平和になって家に帰ってから、普段こんなことって全然ないのよ。星をみながら夜営なんて、非日常的でわくわくするじゃない。すぐに寝ちゃったら損な気がして」
早く寝ろなどと親のようなことをいうカミュに、ベロニカが珍しく言い訳をする。旅の間は使命優先で睡眠不足などもってのほかだったはずの彼女だが、今は少しだけ自分の気持ちに素直になっているらしい。
カミュの悪い癖がむくむくと顔をだす。
「なんだ、子どもみたいなこと言って。眠れないおチビちゃんにはお姫様のでてくる昔話でもしてやろうか……」
「そうですわ！！」
カミュの揶揄からいつもの喧嘩になるかと思ったところで、突然手を叩くセーニャにふたりともぎょっとして視線を向けた。
セーニャは寝袋から起き上がって、興奮ぎみに目を輝かせている。

「お姉さま、呪いを解くのは王子様のキスなのでは？」

一瞬の間のあと、ベロニカが「なるほどね」と答えたことにカミュは心底驚いた。セーニャやイレブンがこういう天然発言をしたときに、同じテンションでいてくれるベロニカに慣れてしまっていたため、最早裏切られたような気持ちすらする。

「盲点だったわ、民話・童話の解呪方法なんて魔術においては基本なのに……」
ベロニカも身を起こし、顎に手をあててぶつぶつと呟きだす。
キスをすることに意味があるのか、王子の血筋に意味があるのか、王位継承権が関わってくるのか、血筋だとしたらひょっとして王家の体質として唾液に何か呪いを解く効果があるとか……？

ちょっとセーニャ、白雪姫とか眠り姫ってどこの民話が元なの！？そのあたりの王家にひょっとしたらヒントが……

大真面目に、おとぎ話と現実を混ぜたような妙な分析を始めたベロニカが、カミュにはふざけているようにしか思えない。
王位継承権はまだしも、唾液とは。

「何言ってんだお前ら……。つーか魔法と科学をへんなところで混ぜるなよ」
いつも共に担ってくれていたはずのツッコミ役がまさかのボケに周り、カミュのツッコミもいまいち冴えない。

「いえ、ふざけてないわ。魔力・術式の出来を左右するのは主に想像力とか意思力とかセンスとか、精神領域の要素が多大に影響するものなんだから。というか精神や感情は魔法のかなり大きな領域を占めるの。童話も馬鹿にできないのよ。」
うんうん、と頷くセーニャに、疑念の表情のままのカミュ。
「でもそうとわかれば先ずは分析が可能な“現物”から！検証しなきゃ！
とりあえず会えそうな王族って誰かしら、イレブンでしょ、おじいちゃん、マルティナさん、デルカダール王、シャール女王……あ、サマディー王とファーリス王子がちょうど近いじゃない！！サマディー王のはちょっと遠慮したい気もするけど、可能性があるならなんでも試したいわね……」

現実的に動き出しそうなベロニカに、カミュは嫌な汗をかく。
「おいおい、全員に『元の姿に戻りたいので試しにキスしてください』って頼んで回るのか？」
「ちょっと！それじゃあたしが変態みたいじゃない！！ちょっと研究のために唾液をわけてくださいって頼むだけよ。」
「まてまて！それも、っていうかそっちの方が変態っぽいぞ！！」

折角の妙案が浮かんだのに、言うこと為すことケチをつけて止めよ

うとするカミュをベロニカはじろりと睨んだ。
「なによ、あたしがずっとこの姿のままでもあんたには関係ないかもしれないけど、文句ばっかりいって足引っ張るのはやめてよね！それとも責任とってくれるわけ？」

「せ、責任？ってその、それはいいとしてだな、王族の唾液云々はもうちょっと多方面からのアプローチを考えてからでもいいだろ、ってことだよ。」
思わぬ飛び火にらしくなくどきまぎするのをごまかした。
「さっきお前言ってただろ、"王子様"のキスに意味があるのか、キス自体に意味があるのかとか。
そっちはどうなんだ」

「まあ、一理あるわね。」
「そうですわ！いつも童話では『愛が奇跡を起こし、お姫様の呪いが解けたのです』というフレーズがありました！」
「必要な因子は王子という身分よりも、"被・呪術者への愛"だったっていうのも一つの仮説として成り立つわね。」
昔読んだ本で野獣の姿に変えられた王子が、真実の愛で元の姿に戻る話もあった、とベロニカが思案する。
「それにキスもですね。」
セーニャが付け加える。
「それでいけば、愛を伝えさえすれば、キスはしなくてもいいんじゃないのか？」
「魔術ではこう、ポーズ的・形式的な行動が鍵になることもあるのよ。だからキスが必要っていうのも、可能性は否定できないわ。」
「魔法ってのはなんでもありだな。わかっちゃいたが、オレには理解できなさそうだ。」
旅の途中でも壁画世界や海底王国など散々不思議な「魔法」に振り回されてきた経験のあるカミュである。
ここまでくると、もう与太話と言わずに真面目に話に付き合う気になってきた。

「王子様は運命や一目惚れで眠り続けるお姫様にキスしてますから、キスされる側が王子様のことを愛している必要はなさそうですね」
「それどころかキスをしてくれる相手のことを、知らなくてもいいのかも」
「……スゲー話だな」

「愛といえば、例えばセーニャがベロニカにキスするっていうのはどうなんだ？」
「なるほど、確かに私はお姉さまを愛してはいますが、家族愛が今回の件に該当するのかどうかと言われますと些か……で、でもお姉さまが元のお姿を取り戻すためなら！」
少し頬を染め、思いきるように拳を握ったセーニャのおでこをベロニカが小突く。
「ばかね、セーニャ。あたしの為なんかにあんたの大事なファーストキスを棒に振ることないわ。気持ちだけありがたく受け取っておくけど」
「お、お姉さま……！！」

「そうは言うけどベロニカ、お前だってファーストキスなんじゃないのか？そうじゃないとこの話、成立しないだろ」
急に水を向けられたベロニカは、たっぷりの沈黙のあと、一瞬伺うようにカミュをみて、それからくすりと笑った。
「そうね。でもあたしは元の年齢に戻りたいの。そのためなら
ファーストキスだろうがセカンドキスだろうが、試してみる価値はあるとおもってるわ」
子どもに似つかわしくない、達観したような、何かを諦めたような表情のベロニカと、複雑な表情をしたカミュの目がかち合う。
ほんの数秒見つめ合う横から、
ふあ~、と大きなあくびがきこえた。

「おねえさま、セーニャはすこしねむたくなってきました……」
「そうね、普段なら絶対寝てる時間だもの。

よし、明日はサマディーで王様か王子に謁見よ。おやすみセーニャ」
最後まで聞こえていたのか怪しいくらいにすぐ、セーニャの規則正しい寝息が聞こえ始めた。

「あたしたちも寝ましょ、思わぬアイデアについ熱くなっちゃったけど。遅くまで話し込んで悪かったわね」

「……なあ、ベロニカ」
セーニャの方を向いて横になったベロニカに、だいぶ間をあけてから、ボリュームを抑えられた声が、どこか遠慮がちにかけられた。

「なあに」

「うぬぼれてるって言われるかもしれないけどさ、お前が元の年齢に戻りたいって言い出した理由、なんとなく察しがついてるんだよな」

ベロニカはセーニャの方へ体を向けたまま、振り返らない。

「可能性としては、王子じゃなくても、姫から愛されていなかったとしても、家族愛以外の愛があるキスなら、有効かもしれないんだよな？」

「……可能性としてはね」

反対を向いた顔は片耳しか見えないが、焚き火の照り返しにしては、色づき過ぎている。

「元に戻るためなら、ファーストだろうがセカンドだろうが、キスくらい試してみるって言ってたよな」

「可能性があるならね」

ベロニカの閉じた瞼の裏に、影が射す。
右隣で話していた筈のカミュの声が、上から聞こえる。近い。

「お前がよくてもオレはよくねえんだよな。
試すならオレからにしろよ」

返事も聞かずに押しつけられた柔らかいものは、少しかさついていて、とても熱かった。

翌朝起きたセーニャは、大人に戻った姉の姿に一瞬目を瞬かせ、
にっこり微笑んで私のお手柄ですね、と微笑んだらしい。
めでたしめでたし。